

「企業は人なり」とは、昔から言われてきたことです。有為な人材を自社に得るにはどうしたらよいのでしょうか。

沖縄県で開業医をしているA医師は、看護師を採用する際、次のような試験を実施しました。「受験者が乗ったエレベーター内に急病人が発生する」という仕掛けを施したのです。「急病人を助けると試験に合わない」という状況になった時、果たしてどのような判断をするのかを見極めました。選択肢は 急病人を見捨てて試験を受ける、試験よりも急病人の看護を優先する、の二つに一つです。

また面接試験では、A医師自身は面接官ではなく受付係を担当しました。面接の場では誰しも自分をよく見せるため、限られた面接の時間だけでは、その人物を見極めることは容易ではありません。

例えば、受付係にも丁寧に挨拶をするかなどを基準に、その人間性を計りました。「知識や経験も必要だが、それだけではなく、人間味は何よりも必須条件。医師や看護師同士の連携を強め、患者の心のケアなども求められる仕事には、人間らしい思いやりや温かみは欠かすことができない」とA医師は話します。

自社に必要な人材を発掘するには、このA医師のように採用時に一工夫加えることも有効な手段でしょう。

しかし、その前提には「見る」ということが欠かせません。人物や物事の本質を見

ありのままを見て 物事の本質を知る



るには、どのような見方をするのが重要になってきます。

倫理研究所の創始者・丸山敏雄は、昭和八年に短歌を学び始め、二十六年に没するまで約六五〇〇首の短歌を詠みました。昭和二十一年三月には、短歌の創作を通して生活を浄化し、精神生活を立て直し、戦後の日本再建のための一助にと、「しきなみ短歌会」を創設しました。作歌について丸山敏雄は以下のように述べています。

はじめは見る（聞く）ことからである。とにかく見る。たびたび見ておると、はじめ変だったものが、次第によく変る。嫌だったものが好きになってくる。

見るは、知るの端（はじめ）である。知ることによって、敬が高まり、和が強まり、愛が深まる。「住めば都」とは、こうした「見（けん）知（ち）愛（あい）」の進行を言ったものである。（中略）

ことさら一部分に執せず、しずかに見ることも、嗅ぐことも、見るの一翼である。

見ることによって、形、色、香と性状がわかり、次第に本質にふれてくる。わかつて来れば、長所美点はいよいよ良くなり、短所も欠点も、同情こそ湧け、悪（にく）むべく嫌うべきなものも残らなくなる。

（『作歌の書』丸山敏雄著）

え・栗木 映
物事の本質を見極めるには、自身の感情や経験・知識をいっさい差し挟まず、ありのままを見ることが必要になってくるのです。